

シンポジウム③

アンチエイジングと中医学

みどころ

いつの時代も人間の夢は「不老長寿」にあります。秦の始皇帝も不老長寿の秘薬を求め、徐福を蓬萊（日本）に派遣したという伝説もあります。もちろん、たんに長生きすれば良いというだけではなく、健康であるということが必要です。そのためには西洋医学的な治療だけではなく、中医学のさまざまな手法が役立ちます。

そこでこのシンポジウムでは、4名のシンポジストにアンチエイジングに対する中医学の可能性について、講演と議論をお願いしました。加島先生には、エイジングの要である腎の概念について、そして臨床応用については、西森先生には主に湯液の視点から、江川先生には主に鍼灸の視点から、最後に萩原先生には、動物実験における漢方薬の抗加齢作用について、それぞれの先生にお話しをしていただきます。

4名のシンポジストの先生方の発表から、アンチエイジングに対して中医学がどのようなことが可能で、また不可能であるかなどについてまとめることができればと思います。

エイジングの鍵を握る腎 —その概念の変遷と対処法—

加島雅之

熊本赤十字病院 総合内科、総合診療科

中医学でエイジングを捉える上で最も重要な概念は“腎”であることは論を待たない。しかし、この腎の概念は成長・老化、泌尿、生殖、一部呼吸器、骨・脳機能や人体の寒熱に大きな影響を与えていたなど、数多くの系統の生理機能を含有した概念でとらえ難い。また、生命の根源である先天の精を主っているため、全ての疾病は最終的に腎の問題となり、特異的な症候もないことも分かりにくさの原因となっている。また、その治法も補のみか、瀉も存在するのか、寒熱の調整が主軸なのか、漏れるものを引き込むなどの多彩な方法があり、治療薬も六味丸・八味丸などのベースとなる地黄・附子・桂皮を使用するもの、中医分類の補陽薬に分類される補骨脂、肉蔻などを使用する者、動物生薬を加えるものがあり、寒熱の調整を中心とした治療方剤もある。

こうした分かりにくさの背景には歴史的な経緯があり、概念の変遷がある。黄帝内經では腎は“水”であるために人体の根源と理解されていた。また、その生理機能は“内側に引き込み”・“持続する働き”を維持するものと想定されてきた。その後、南北朝になると以降支配的になる臟腑における虚実と寒熱の概念の結びつき（虚－寒、実－熱）が最初に認められている臟腑である。南北朝の医学を集大成し唐代医学の標準となった千金方では、補腎の代表方剤は“建中湯”類であり現代の建中湯の概念や腎の病態のとらえ方、治療法に再考が促すものであろう。南宋代に以降の医学の中心命題となった“相火”は腎に強固に結びつき、以降の腎の概念は相火の議論によるものが大きい。この相火の認識と対応法が金元代以降の医学の流派生み出した。こうした過程で補腎の基本病態が腎の陰虚による熱と捉えられるようになり、特殊な補腎方剤であった六味丸が補腎の代表方剤に位置づけられ、それに伴い八味丸も補腎の代表方剤へと変化してきた。

腎は中医学理論の変化の原動力となった中心命題として常にあり続けてきた。このため腎の概念とその治療法を理解することは単に一つの臓の診断・治療をよりよく理解することを超えて、中医学の人体の捉え方、学問の方向性を知ることになり、中医学の発生当初から最大の目的の一つであるアンチエイジング、その究極である“不老不死”へ到るための模索を知ることになる。